

海は蘆屋洋として、旅客の甚だおそる、所なり、略○中 永祿元年、秀吉公朝鮮に軍勢を渡し給ひける時、此湊に船をあつめて渡海させらる、池田備中守長吉其事をつかさどり、此湊近き世まで、三頭の上猪隈の遙迄入海ふかくして、大船滞なく上下せしといふ、今は然らず、

〔日本書紀神武〕甲寅十一月甲午、天皇至筑紫國崗水門、

〔日本書紀仲哀〕八年正月壬午、幸筑紫時崗縣主祖熊鰐、聞天皇車駕、略○中 參迎于周芳沙磨之浦、而獻

魚鹽地、略○中 既而導海路、自山鹿岬廻之入崗浦、到水門、御船不得進、

〔萬葉集抄八〕崗水門は筑前の國にあり、風土記云、塙舸縣之東側、近有大江口、名曰塙舸水門、堪容大

泊焉、從彼通島鳥旗澳、名曰岫門、岫門鳥旗等波多也、堪容小船焉、海中有兩小島、其一曰河叫島、島生支子、

海中出鮑魚、其一曰資波島、資波、紫摩也、兩島俱生鳥葛冬薑、鳥葛黑葛也、冬薑迂菜也、

新宮港
〔筑前國續風土記糟屋郡〕新宮湊

昔は此所に入海有て、船入し故湊といへり、無題詩集の注に、此所に住吉の神の勸請せし故に、新宮と號といへり、湊の有し、近き世に田となり、今田の底を深く堀ば、蛤蠣の殻多くいづ、此所出崎に神社あり、磯崎大明神と號す、是則住吉の神なり、略○下

〔本朝無題詩旅七〕乘舟到新宮湊

釋蓮禪

渡口宿時望地形、幽奇旁似畫圖屏、沙塘岸遠漁村白、松樾山高鳥路青、歸洛老年拋劇霧、有注行舟曉燭插殘星、一留一去春天旅、霞色潮聲入視聽、

藤原周光

征途天曙不逃形、海渚風流展翠屏、漁戶傍汀春柳暗、靈祠移岸古松青、傳聞住吉靈社移暫妨解纜千

飜浪、渺告歸程一點星、星也、路遠自今唯算日、波卸宜問楫師聽、

〔長崎港草〕名義 長崎ノ古名數々アリ、昔ハ瓊杵田津トイヒ、又深津江ト云、或ハ瓊浪浦トシ、瓊

肥前國
長崎港